人権集会について考える

本年度(2018年度)の人権集会の様子と、人権集会を持つことの意義について、私なりにまとめ、「たより」でお知らせしました。

次ページからの「〇〇っ子だより　№23」をご覧ください。

○○っ子だより

2019.2.1
○○小学校
No.　23

辛い経験を語った人権集会

誘ったが、いっしょに帰れないと言われた。無視された。
学校に行きたくないと思った。

1月29日(火)1限目、人権集会がありました。生活集会委員会と6年生が企画運営した集会です。子どもたちは今回も落ち着いた雰囲気で体育館に集まってきました。司会から「静かにしましょう」という声かけをすることなく、人権集会が始まりました。

初めは、生活集会委員会による劇とクイズです。あってもいい違い、あってはいけない違いがテーマでした。最後に、ピンクのランドセルを背負った男の子がからかわれる場面があり、男の子がピンクのランドセルで通うことについて、考え合いました。隣の子と話し合い、全体での発表です。まずは3年生が指名されました。「ピンクのランドセルでもいいと思います。理由は、…」　続く、3人も同様の話し方でした。話し方がきちんとできていることに感心しました。

次は6年生が主体となった話し合いです。テーマは「なぜ、いじめや差別はなくならないのか」です。

「自分は誰かを傷つけていないか、自分のこととして考えましょう。されている側になって考えましょう。自分のこととして発表を聞いてください。」

司会者からみんなに呼び掛けられた言葉です。

初めに6年生5人が自分の経験や思い・決意を述べました。

「差別と意識していないのに、していた。注意できなかった。だめなら、だめと伝えたい。」

「仲間はずれにされた。誰にも相談しなかった。反対に、自分が遊びに入れてあげないときがあった。また、自分には注意を言える人と言えない人がいる。」

「誘ったが、いっしょに帰れないと言われた。無視された。学校に行きたくないと思った。」

以上の話を聞いて、自分の思いを隣の人と話し合い、全体で交流しました。1年生から6年生まで12名が発表しました。

○5年生「相手によって言い方を変えてしまった。」
○3年生「いじめられている子を助けられなかった。助けられるようにしたい。」
○1年生「自分がされて嫌なことは人にはしてはいけない。人に嫌なことをしない。」
○2年生「悪口を言われた。とても嫌な思いをした。次の日も言われたら…。」
○5年生「貸す子、貸さない子を分けていた子がいた。止められなかった。」
○4年生「自分もしているかもしれない。意識しようと思う。」
○6年生「相談することはいいことだと思う。」
○2年生「いじめられている子がいた。止められなかった。」
○6年生「なくしていきたい。」
○3年生「いじめている側になっていることがあるので、止めたい。」

改めて、6年生代表の一人が、給食の食材で食べられないものがあることで、嫌なことを言われた経験を発表しました。

話し合いのまとめに変えて、6年生代表者数名から、自分の今の思いや考えを、発表しました。その中に、「差別について考えあう授業を受けて勇気が出てきました。」という言葉がありました。

最後に、今回の人権集会を終えて、考えたことを話し合いました。周りの子と話し合った後、全体での交流です。

○5年生「差別をしたり、(人によって)きつく注意したりしていた。相手ことを思い、誰にも同じようにしていきたい。」
○6年生「意識してまわりを見ていこうと思う。」

5名が発表して人権集会が終了しました。

辛かった自分の経験や、あるべき姿になっていない自分の姿について、たくさん発表がありました。そういったことを交流しあい、改めて、子どもたちはいじめや差別をなくしていこうという思いを強くしたに違いありません。

人権集会で
なぜ、自分の辛い経験が発表できるのか。

友だちに自分の辛い経験を言えるときは、その人が自分の思いをきちんと受け止めてくれるという思い(安心感)があるときです。きちんと受け止めてくれるからこそ、言おうという気持ちになれるのです。今回の人権　【裏面に続く】

集会でも同じことが言えます。初めに、司会者から「自分は誰かを傷つけていないか、自分のこととして考えましょう。されている側になって考えましょう。自分のこととして発表を聞いてください。」という言葉がありました。この言葉に加え、全校のみんなは自分の話をきちんと受け止めてくれるという思い（安心感）があるからこそ、自分の辛い経験や、人には知られたくない本当の自分について、発表できたのです。〇〇小学校の中に、こういった子ども同士の関係性ができあがっているのだと思います。数年前から、今回のような人権集会を開催することができています。本校の伝統となりつつあります。本校の強みの一つだと自負しております。

人権集会で
なぜ、自分の辛い経験を発表するのか。

今度は辛い経験を発表することのよさを整理します。伝える側から考えてみました。自分の思いを受けてもらえるという安心感のもと、辛い思いを伝えることで、辛くてもやもやする思いがすっきりするのだと思います。自分が辛い思いから解放されるのではないでしょうか。辛い思いから解放されることで、辛い過去にとらわれることなく、次に進んでいけるのだと思います。

聞く側から考えてみました。人の辛い思いを聞くことで、改めて、される側の思いを受け止めることができるようになります。これにより、今まで以上に、いじめや差別はダメであるという気持ちが強くなると思います。また、自分はいじめる側になっていないか、また、自分の周りで同様のことはないだろうかと振り返ることができます。いじめや差別の予防や発見、解決につながると考えます。

これらのことを我々は期待し、人権集会で自分の辛い経験を発表する取り組みを続けています。もちろん、自分の辛い経験をみんなの前で発表することは容易ではありません。今日の人権集会に至るまでに、担任と個人、友だち同士、学級、学年など、多様な形で話し合いを幾度となく繰り返し行ってきました。これなくしては、人権集会は開催できないからです。

随分と素晴らしい人権集会でしたが、課題はまだまだあります。子どもたちの更なる成長のために、また、来年度の人権集会に向けて、今回の集会までの取り組みや、集会当日の様子を教員同士で振り返り、課題を整理して、次につなげていきます。

本校に、いじめはあるかと問われれば、……。
～小さないじめを解決する経験を積むことが重要～

人権集会での子どもたちの発表を記載したとおり、子どもたちは、いじめをした、された、止められなかったという経験を語っています。つまり、本校にもいじめはあるということです。個人により違いはありますが、時には、同じ子が、いじめたことがあり、また、いじめられたこともあり、そして、いじめを見て止められなかったということもあるということです。大事なことは、これらのいじめについて解決することを経験させることです。いじめに大きい小さいがあるかどうかの議論はさておき、小さいいじめを解決する経験を積むことです。これにより、いじめでどれほど人が傷つくかを理解することができます。何がいじめなのかという認識がはっきりしてきます。誰かに相談することがいじめ解決の第一歩であることを知ります。具体的ないじめの解決方法を学びます。解決することで、友だちとのつながりが深まります。

人権集会で子どもの発言にもあったように、我々は、大人も子どもも、いじめはあるかもしれないという意識をもって生活することが大事です。常に“いじめかも”という意識があれば、いじめの発見やそれへの対応が遅れることはありません。

本校でも、教職員間で共通理解をしていることは、いじめがあったか、なかったかということよりも、いじめかもしれないという認識に立ったときの初期対応を重視するということです。そして、いじめかもしれないという認識に立ったときには、同僚に相談すること、管理職に報告すること、必要と判断すれば、組織で対応することとしています。いじめに限らず、何か気になることがあれば、何なりと、担任、養護教諭、スクールカウンセラー等々、本校教職員の誰でも結構ですから、ご相談ください。　（ 〇〇小学校　☎　〇〇〇〇 ）